様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　(共通)

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２２７０

研究課題名（和文）中野重治の肉筆原稿、書簡、日記他第一次資料研究

研究課題名（英文）The research and studies of Nakano Shigeharu's manuscript,letters,diary

研究代表者
林　淑美（LIN, Shukumi）

立教大学・文学部・特定課題研究員

研究者番号：８０４４５１５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、中野重治の肉筆原稿、書簡、日記などの調査と研究である。加えて、最近困難な状況にある文学館との協力の社会的意義の追求も目的である。近代文学研究において肉筆原稿等第一次資料の調査はきわめて大切であるが、調査の対象となる原物は適切に整理・保存・収集されねばならず、そのための作業は研究者の重要な任務である。中野重治の第一次資料を所蔵しているのは石川近代文学館、神奈川近代文学館、中野重治文庫記念坂井市丸岡図書館、日本近代文学館である。これら文学館との協力によって、本研究の肉筆原稿・書簡の整理と調査、戦後日記の翻字とデータ化等が実現した。

研究成果の概要（英文）：This research aims to study of Nakano Shigeharu's manuscript, letter, diary etc. In other hand, pursuit of the social significance of cooperation with the literary museum which has recently been in difficult circumstances for research's of individual writers' studies. In modern literature studies, survey of original manuscripts is extremely important, but the original materials to be surveyed must be properly organized, preserved and collected, and the work for doing so is an important mission of Japanese modern literature scholars. Ishikawa modern literature museum, Kanagawa modern literature museum, Nakano Shigeharu bunko memorial at Sakai shi Maruoka library, and the Japan modern literature museum are holding the first material of Shigeharu Nakano. Through cooperation with these literary museum we realized the survey and investigation of the manuscripts and letters of this research, the transliteration of Nakano’s postwar diary and data conversion to digital version.

研究分野：日本近代文学・近代思想

キーワード：日本近代文学　思想と文学　昭和時代と文学　歴史と人間　プロレタリア文学　作家と肉筆資料　中野重治

１．研究開始当初の背景

日本学術振興会科学研究費を平成２７年度から交付された本研究は、中野重治の肉筆原稿、書簡、日記などの調査と研究が目的である。加えて、最近困難な状況にある文学館との協力の社会的意義の追求も目的である。近代文学研究において肉筆原稿等第一次資料の調査はきわめて大切であるが、調査の対象となる原物は適切に整理・保存・収集されねばならず、そのための作業は研究者の重要な任務であるが、この仕事は、資料を所蔵している文学館との協力によって進められることが多く、また生の資料を扱うため著作権者であるご遺族から信頼されねばならない。長い時間を要するこうした協力関係・信頼関係を築くことができるのは、キャリアを積んだ研究者によって可能である。中野重治の文学の特徴を簡潔に言えば、文学的仕事が生涯の終りまで続行されたことと、文学と思想、歴史と社会とに相渉ったその仕事が多岐に亙っていることである。したがって、残された資料も多くその資料の性質と内容も一様ではない。中野重治の第一次資料の調査が求められる所以である。しかし、中野重治の場合、この調査は殆どなされていない状態にある。本研究を通して、中野重治の全仕事が可視化されることにより、近代日本文学と近代日本文学研究への大きなインパクトを与えることは間違いない。

文学館との協力の社会的意義について述べれば、昭和４２年に、財団法人日本近代文学館が設立されて以来、近代文学関係の資料を収集し保存することの現代的意義が多くの人に認識され始め、文学館というものが重要な存在として社会に位置づけられてきた。そして昭和５９年の神奈川県立神奈川近代文学館の開館、同年の大阪府立国際児童文学館の開館は、文学者や文化人、府県民の協力のもと地方自治体が設立した文学館として広く関心を喚起し、以降文学館運動の更なる展開を支えてきた。それは文学館の活動が文学資料の収集・保存・公開にとどまらず、文化振興・学術振興の拠点となる新しい形を示してきたことによると思われる。日本近代文学館の設立ののち、各地に設立された文学館は博物館機能をも備えた機関であることを目指しながら各地方における文化研究・文化運動を支えて、日本人の文化的共有財産がさらに広く守られていくことになった。しかしここ十数年ほど前から、文学館が抱える困難な問題も明らかになってきた。専門的知識や技術と多くの労力とを必要とする資料の保存や展示に加えて、文化センターとしての役割を担うべき講演会や講座の開催や出版事業など文学館の多様な業務を行うことの困難さは推測できるところだが、加えて財政的な面での問題が大きくなってきたように思われる。それは、平成２１年に、財政難を理由として当時の大阪府知事の強い意向で廃館になった大阪府立国際児童文学館の問題に象徴的に現れている。本研究で行う、文学館所蔵の中野重治資料に関する作業を、研究代表者はこうした状況における文学館への、研究者が出来得る協力と位置づけている。

本研究開始前の各文学館所蔵の資料整理の状況について述べる。中野重治の第一次資料の大方は、次の４館が所蔵している。財団法人石川近代文学館（肉筆原稿書簡等）神奈川県立神奈川近代文学館（書簡・日記等）公益財団法人日本近代文学館（原稿、遺品等)、そして生地の近くに建てられた中野重治文庫記念坂井市丸岡図書館（書簡・遺品・肉筆原稿等）である。

まず石川近代文学館に多く所蔵されている肉筆原稿の状態について記す。中野重治には日本近代詩史に特異な位置を占める『中野重治詩集』（1931 年刊）や、文学的出発期から戦中期、戦後まで書かれた多くの小説と、歴史と社会に相渉った大量の文学批評・社会批評とがある。原稿は、おおよそで言って現存の七割ほどが、ご遺族により石川近代文学館に寄贈された。それは総点数約１６００点、原稿用紙にして２万枚ほどにのぼる。これは他に類をみないほどの量であり、近代文学資料第一級のコレクションであることは誰もが認めるところである。これらの原稿は、中野重治歿後の１９８０年代に、夫人（平成元年歿）によって石川近代文学館に託された。しかし託された石川近代文学館は、残念ながら人的・経済的条件が整わず、資料はほぼ未整理、保管状態も不適切なままの状態に長年おいておかれた。平成１６年になって、資料の状態を案じた、中野重治のご遺族と本研究の研究代表者が属する「中野重治の会」事務局とが、石川近代文学館に然るべき形での整理と保存を申し入れた。その後曲折はあったが「中野重治の会」事務局と石川近代文学館とが共同して整理作業を進め、平成２０年に『中野重治原稿資料目録』が、両者に石川県を加えた三者の名で刊行された。続けて資料公開のための整理作業を進め、平成２４年にご遺族と文学館の話合いをへて正式に資料の寄贈となったが、より充実した目録刊行と、資料公開のために資料撮影などのデータ作成の作業を現在も続行している。石川近代文学館所蔵の肉筆資料には、定稿以外の異稿草稿断片メモの類もあるのが大きな特徴である。これらは、定稿までの過程を知るために大切で上記目録にも記載した。定稿というのは、１９７０年代に刊行された第二次『中野重治全集』に収められた版をいう。中野重治には三種の全集があり、一次全集は１９６０年代に、三次全集は１９９０年代に刊行されたが、どの版にも、異稿、草稿についての情報の記載が殆どない。つまり、肉筆資料の調査は、平成１６年以降の石川近代文学館における代表者たちの作業によって初めて端緒についたのである。石川近代文学館以外にも、中野重治文庫と日本近代文学館には幾つかの重要な原稿が所蔵され、これも調査が求め

られる。上記目録は不完全なものであり、より充実した目録の刊行と資料公開の準備のため作業の続行が今後も必要である。
次に、書簡の状態について記す。書簡の多くは、神奈川近代文学館と中野重治文庫記念坂井市丸岡図書館が所蔵している。丸岡図書館は、中野重治歿後の昭和５８年、中野重治蔵書が生地である旧丸岡町へ寄贈されたのを機会に、地域の図書館も併設された中野重治文庫記念丸岡町民図書館として発足した。中野重治文庫は寄贈された中野重治旧蔵書が中心だが、他の資料も多くある。所蔵の書簡は８００通ほど、館の性質上中野の親しい友人への手紙が多い。たとえば、社会思想研究の石堂清倫、文学批評の小田切秀雄らへ宛てたものは歿後ご遺族から寄贈された。これらまとまった資料は、受信者ごとに小冊子が作成されているが、他の原稿その他を含む全体のリストは作成されていない。つまりリスト化されていない資料が多くあるということである。紛失を防ぐためにも早急なリスト化が求められている。なお平成２４年に松下裕他編『中野重治書簡集』が平凡社から刊行されているが、収録数７６５通の大部分は中野重治歿後、知人に宛てた中野の手紙を、夫人が借りてコピーしたものを使用しており、文学館所蔵資料は調査されていない。
次に、日記の状態について記す。中野重治の日記は、２７冊遺されている。昭和９年が１冊、昭和１６年から２０年までの５冊、昭和２８年以降歿する５４年までの２１冊である。昭和２０年までの６冊は神奈川近代文学館に寄贈され、平成６年に中央公論社から松下裕編『敗戦前日記』として刊行された。昭和２８年以降の２１冊はご遺族のもとにあったが、平成２８年神奈川近代文学館に寄贈された。本研究では、戦後史においても中野重治の個人史においても重要な昭和３８、３９、４０年を対象とする。昭和３８、３９年の日記については、明治学院大学教授であった滿田郁夫氏を代表とした「日記の会」が科研費を申請し平成１４年４月に「研究成果報告書」を提出している。この報告書は本文を起し事項注・人名注を付したものであるが、データ化されていない。本研究においては、この本文と注の点検をしたのち、昭和３８、３９年と、４０年を加えた原本の全頁撮影と本文のデータ化をまず行ない研究の前提作業とする。

２．研究の目的
明治期の中葉に生まれ大正期に高等教育を了えた中野重治(1902 年生 1979 年歿)の、昭和期の初頭から始められた文学的活動は、戦時下、敗戦を経て高度経済成長を経験し昭和５４年に歿するまでほぼ途切れることなく続けられた。戦前・戦中・戦後を跨いで続けられた政治活動を含みながらの、彼の文学者としての仕事は、日本の近代の発端と展開と結末とを問いつづける作業であった。その作業は、芸術的表現を基としつつ、哲学あるいは科学にまで繋がらないではおかない言語活動の普遍性というべきものを、すなわち広義の文学というべきものを実現したものであった。思想とはそうした普遍的な言語活動全体を指すのであるなら、中野重治の仕事は、二十世紀日本の近代の社会もしくは歴史を、個人・自己の場所から絶えず読み直していくということに外ならなかった。この点において中野重治は日本近代の文学者として独自の位置にありかつ重要な存在である。本研究における中野重治の戦後日記の翻字を含む第一次資料の整理と調査は、日本の戦後史を文学の言葉で照射するという近代文学研究上貴重な研究となる。これを調査が殆どなされていない第一次資料の精査から検証し、跡付けて、多様な中野重治の仕事を正しく位置づけることが本研究の目的である。文学館との協力は、「１．研究開始当初の背景」の項で述べた背景のもと、まずは資料の整理と公開その上での調査である。中野重治の第一次資料の大方は、「１」の項で述べたように、次の４館が所蔵している。石川近代文学館（肉筆原稿書簡等）神奈川近代文学館（書簡・日記等）日本近代文学館（原稿、遺品等）中野重治文庫記念坂井市丸岡図書館（書簡・遺品・肉筆原稿等）である。
石川近代文学館所蔵の資料については、公開のための作業として全資料のデータ化を行うことを文学館との協議で決定した。そのためにまず全頁の撮影を進めることになる。財政的に困難な石川近代文学館であるから、本研究も学芸員と協力して撮影することになった。石川近代文学館所蔵の資料は定稿以外の異稿草稿断片メモの類もあるのが大きな特徴であり、それは『中野重治原稿資料目録』にも記載したと「１」の項で述べたが、これらの定稿との異同の精査はまだ行なっていない。本研究はこれも行なう。
本研究の目的の一つである中野重治の戦後日記の翻字を含む調査は、日記を所蔵する神奈川近代文学館の協力があってのことである。対象とする昭和３８、３９、４０年の原本のデータ化をまず行い、そしてパソコンによる入力、本文点検、注作成等の作業を行う。書簡について述べれば、これを所蔵しているのは、「１」の項に記したように、神奈川近代文学館と中野重治文庫記念坂井市丸岡図書館である。神奈川近代文学館はスタッフも充実しているので整理作業の協力は必要ない。中野重治文庫記念坂井市丸岡図書館は、文学館でなく図書館であって、文庫のための学芸員は配属されておらず、司書が文庫を担当している。そのためリストの作成の仕方や保存の仕方も不充分である。平成２４年ころから改善を申入れて書簡のリスト化から始めているが、ここは館員の協力はあまり期待できないので、仕事はなかなか捗らない。文庫所蔵の書簡及び肉筆原稿の整理作業はまだ始まったばかりである。但し、科研を申

請した平成２７年以降は、忙しい図書館の平常業務にもかかわらず丸岡図書館は中野重治文庫での整理作業に館員を一人配してくれるようになり、作業は大分進行するようになった。福井市から距離があり交通の便が悪くタクシーを利用しなければならない丸岡図書館には、代表者が一人で通い仕事をする。本研究の目的の一つは、中野重治文庫の所蔵資料の目録作成である。できれば、この目録を刊行したいと考えている。「１」で述べたように、リスト化されていない資料が多くあり、あっても寄贈者別のもので全体を統一したリストではないからである。

日本近代文学館には、原稿や訳稿、書簡等、多くの資料が所蔵されている。さらに平成１８年に中野重治ご遺族がまた多くの資料・遺品が寄贈された。その遺品のなかに中野家が保存していた戦前からの写真が四百点ほどあった。写真の整理は、そのリストに日時、場所、撮影者、被写体の人物等が記されて完全になるが、これは難しいことで熟練した館員でも、中野重治研究を専門にしているわけではないのでわからないことが多い。これの整理を代表者はご遺族にも協力をお願いして行なったが、まだ途中のこの作業を終了させなければならない。

研究代表者は、本研究開始以前に、石川近代文学館において、平成２５年、展覧会「中野重治　肉筆原稿に見る<文学者>として生きた生涯」を監修・作成し、記念講演を行った。神奈川近代文学館においては、平成２４年に催された、展覧会「中野重治の手紙　『愛しき者へ』」の際、記念講演を行った。日本近代文学館においては、平成２５年、所蔵資料についての館の論集に中野資料に関する論考「中野重治の鷗外論と書込み「ゲエテにおけるクライスト」」(『日本近代文学館年誌資料探索８』）を発表した。また神奈川近代文学館、日本近代文学館において評議委員を、石川近代文学館において専門委員会委員をつとめている。これらも、個人でやりうる事は限界があるが、文学館への協力の仕事と位置づけている。

文学館所蔵の第一次資料の整理と精査・検証は、後代へ文学遺産を伝えるための重要な仕事である。近年のパソコンの普及やインターネットの拡大は、文学の現場にも文学研究の現場にも多くの変化をもたらしている。パソコンの導入や情報処理などの技術革新は出版事業においてもその有用性は言うを俟たないが、しかしこうした新たな環境によって失われたものも甚大である。たとえば肉筆原稿などに見られる手書きの伝統的手法である。近代文学よりも古典文学に一層顕著なこのことは、技術革新の実用性をどう相対化するかが大きな課題になるのを示している。手書きのならわしが失われれば、手書きで書かれた資料の意義の理解への障碍につながる。たとえば、作品を考えるにあたって重要な手掛かりになる手書き原稿の挿入や抹消、書直しなどの、パソコンによる原稿にはない情報の学問的処理について、将来の研究者はこれまでにもまして努力が求められるだろう。現代の文学界にあってデータ化された原稿が殆どであるという今、手書き原稿のもつ情報をどのように研究上の課題として扱うか、という学問的訓練の場所と材料が確保されなければならない。文学館の意義は、資料の保存・整理にとどまらず、こうした場の提供という意味でも、多大な要務を帯びる。後代へ文学遺産を伝えるための仕事は、手書きの伝統的手法のなかで生きてきた世代の研究者にとって、肉筆資料の学問的処理を後代に伝えるということも含まれることになる。

中野重治の第一次資料は、上にあげた４館だけでなく、各地の文学館も所蔵している。本研究の実施中には、世田谷文学館、福井県ふるさと文学館が文学史的にきわめて貴重な原稿を入手している。また中野と交流のあった文学者の記念館にも書簡その他が収められていると思われる。中野の第一次資料の所在－どこに何があるかを明らかにしておくことが求められている。

３．研究の方法

本研究における中野重治の肉筆原稿、書簡、日記他第一次資料の調査と研究は、その前段階として、整理と保存がある。本研究がおもに調査・研究を行う石川近代文学館と中野重治文庫記念坂井市丸岡図書館の状況は、これについてまだ十分とは言えない。本研究はこの二館に出向いての仕事となる。本研究の方法を記すにあたって、原稿、書簡、日記、その他に分けて、各資料所蔵文学館との協力の仕方に留意しながら記述する。

肉筆原稿については、「１」の項に記したように、現存のものは石川近代文学館に多く所蔵されている。平成２０年の「中野重治の会」と石川近代文学館、石川県の三者による『中野重治原稿資料目録』刊行後の作業は、より充実した目録の刊行と資料公開の準備のための仕事が中心になっている。資料公開は写真版による閲覧というのが文学館の方針になり、それに必要な撮影作業を行なっている。この撮影作業と並行して肉筆原稿の研究を行っている。石川近代文学館での仕事は長期にわたっていることは「１」の項で記したが、本研究のメンバーの４人全員が、金沢市にある文学館に通える時間的・経済的条件を常にもっているわけではない。文学館から経費の支給や謝礼はなく手弁当の仕事である。科研費交付以前は比較的時間が自由になる研究代表者が文学館職員一名とともに整理作業を行っていたが、交付以後は科研費を利用して文学館に通えることになった。

次に、書簡については、中野重治文庫記念坂井市丸岡図書館での作業が中心となる。ここも経費の支給や謝礼はなく、さらに福井県坂井市にある丸岡図書館は交通の便が悪く、石川近代文学館より通いの面では条件が悪

い。丸岡図書館には、石川近代文学館と同様に科研費交付以前は研究代表者が私費で通い整理作業を行っていたが、交付以後は科研費を利用して通えることになった。「２」の項で述べたように、中野重治文庫記念坂井市丸岡図書館は、文学館でなく図書館であって、文庫のための学芸員は配属されておらず、司書が文庫を担当している。そのため保存の仕方やリストの作成の仕方も不充分である。文庫ではこれまで適切ではない保存の仕方をしていたのでまずこれを改めなければならなかった。資料の保存には、そのための函と袋が必要で、これの購入を図書館に要望した。劣化している資料もあるのでリスト作成の前に、資料を保存袋保存函に収納することから始めた。これらの作業に加えて、中野重治文庫には中野家に伝えられた江戸期の古文書類を含む、また中野家の祖先が八百年前に来たという高椋村一本田という村の歴史を伝える資料―これは地方（じかた）文書という歴史資料にあたる―全３４５点の「中野家文書類」という資料の整理がある。古い資料なので劣化も進み適切な保存袋保存函に収納するのは急を要した。科研費交付中石川近代文学館には、年２回ほど、中野重治文庫には年３回ほど通っての作業となった。

次に、日記であるが、中野重治日記の所蔵状況その他の詳細については「1」「２」の項で述べた。日記についての研究を行うことは以前から著作権者のご遺族にご了解いただいている。日記研究だけでなく、石川近代文学館での肉筆原稿の研究、中野重治文庫記念坂井市丸岡図書館での書簡の整理・リスト化の作業についても、これまでもご遺族に経過を説明しており、これからもそうしなければならない。また、所蔵する神奈川近代文学館には特別資料を借りるという形になる。

昭和３８、３９、４０年の日記の研究を行うのだが、その意義については「２」の項に記した。本研究の研究計画では、上記肉筆資料・書簡研究と並行しての作業になることもあり、この三年分のみの作業だけでも時間的不足が予想された。手順としては、この三年分の①原本の撮影とデータ化、②本文の判読と検討、③アルバイトによるパソコンでの本文入力、④事項注・人名注の項目の選定、⑤注付け作業となる（昭和３８、３９年の二年分は「1」の項に記したように本文判読と注付けはなされているが、しかしこれの点検はしなければならない）、もし時間があれば他の１８年分の撮影と入力も行いたい。これらの作業は、研究協力者とともに月に一回ほどの回数で研究会という形をとって行った。研究会にはご遺族にも協力をお願いし参加いただいている。

最後に加えれば、　上記の原稿、書簡、日記などの他に、ご遺族が保管している雑多なものであると同時に重要なものが含まれていると思われる多くの資料がある。それは、宛書簡、草稿、メモ、手帳、政治資料、ゲラ（書き込みのあるものあり）新聞（書き込みのあるものあり）、切り抜き、雑誌、寄贈された論文・抜刷りといったものである。これらは整理、リスト作成を行ったのち、研究に資するものとするために、然るべき文学館・資料館に寄贈されなければならない。

４．研究成果

本研究は、中野重治の肉筆原稿、書簡、日記などの調査と研究である。加えて最近困難な状況にある文学館との協力の社会的意義の追求も目的であることは、上記の項で繰返し述べた。中野重治は、戦後の文学と政治を生きた稀有な文学者であった。本研究における中野重治の戦後日記の翻字を含む第一次資料の整理と調査は、日本の戦後史を文学の言葉で照射するという近代文学研究にあって貴重な研究となる。

中野の第一次資料の所在－どこに何があるかを明らかにしておくことが求められている、と「２」の項で記したが、この点においても本研究実施中に進捗があった。平成２７年２月開館した福井県立ふるさと文学館が入手した肉筆原稿がある。文学史の上でも中野重治研究の上でも、大変重要な「「文学者に就て」について」という１９３５年発表のエッセイである。戦前のものは、時間の経過ということだけでなく、大震災があり戦災・空襲があったのだから失われることが多く、しかも重大な思想犯である中野重治の場合、保存はより難しいということがある。これについては、研究代表者の論考「福井県ふるさと文学館所蔵「「文学者に就て」について」の肉筆原稿に関する報告」がある（『梨の花通信』第６４号　２０１５年）。また研究代表者はこの資料を主要な展示とした福井県ふるさと文学館が催した「中野重治　ふる里への思い、そして闘い」と題した中野重治展覧会を監修し、記念講演を行なった（２０１６年１０月）。戦時下戦前の肉筆原稿は、昭和１８年に書かれたものが石川近代文学館に一点、１９年に書かれたものが日本近代文学館に一点あったのみで、上に述べたように殆ど現存していない状況において、同じ平成２７年に世田谷文学館が、昭和１０、１１年に書かれた小説３点、１９年に書かれたエッセイ２点を受贈した。すべて大変貴重なものである。敗戦前のものはもう出ないだろうという、大方の予想するところを大きく裏切ったまことに喜ぶべき出来事だった。これについては、研究代表者の論考「驚きの肉筆原稿出現――中野重治の転向連作と鷗外論」がある（『世田谷文学館ニュース』第６３号、２０１６年）。また上記日本近代文学館所蔵の一点についても研究代表者の論考がある（「中野重治「『暗夜行路』雑談」を読む」『日本近代文学館年誌』１３号２０１８年）。

上記の項で繰返し述べたように、中野重治の第一次資料の大方は次の４館が所蔵している。石川近代文学館（肉筆原稿等）神奈川

近代文学館（書簡・日記等）日本近代文学館（原稿、遺品等）中野重治文庫記念坂井市丸岡図書館（書簡・肉筆原稿・遺品等）である。科研費交付以前からおもに調査・研究を行っていた石川近代文学館と中野重治文庫において、前者は肉筆原稿の公開のための作業とより充実した目録の刊行のための作業、後者は書簡・肉筆原稿の整理、所蔵リスト作成、内容の調査を進めていた。科研費が交付された平成２７、２８、２９年度の三年間で、上記の作業、石川近代文学館での、肉筆原稿公開・目録刊行のための作業、中野重治文庫所蔵の書簡・肉筆原稿の整理作業を順次行い、これらは大きく進行した。中野重治の日記については、昭和３８、３９、４０年の全頁撮影とＰＣによる入力、本文点検、注作成等の作業を進行させた。

中野重治文庫においては、書簡の整理とともに、２８年度から２９年度にかけて、中野家に伝えられた古文書類を含む、全３４５点の「中野家文書類」という資料の整理を行って終了した。この資料の研究成果の一つに「中野家文書類」として保存されていた「宗門人別改帳」（しゅうもんにんべつあらためちょう）を翻刻した研究代表者の論考「中野重治文庫記念坂井市丸岡図書館蔵「宗門御改帳」翻刻にあたって」がある（『梨の花通信』第６５号、２０１６年）。江戸時代の戸口調査である「宗門人別改帳」は、明治４年戸籍法が作られるまで作成されたが、藩に提出されたものは廃棄されることが多かったといわれ村に残されたものは貴重なものである。

上の文学館の作業と並行して日記の研究を行った。日記は昭和４０年から始めて３８、３９年と進めた。所蔵する神奈川近代文学館の協力を得て、作業は研究協力者４名と中野重治ご遺族にも協力頂き、本文起しと点検、注立て項目の選定を行い、平成２７、２８年度の２年で昭和３８年（４月まで）、４０年の作業が終了していた。平成２９年度は、注立て項目の選定を後回しにして残りの本文起しと点検を先行させ、昭和３８年後半と３９年５月まで本文起しと点検を半年分残し終了した。全頁撮影とアルバイトによるパソコン入力作業は、平成２９年度で全３年分が終了し、本研究当初の目的であった全３年分の原本撮影を含むデータ化が完成した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　６　件）

①林淑美　「中野重治「『暗夜行路』雑談」を読む」『日本近代文学館年誌』１３号　２０１８年　６０～７８　査読無し

②林淑美　「中野重治文庫記念坂井市丸岡図書館蔵「宗門御改帳」翻刻にあたって」『梨の花通信』　第６５号　２０１６年　１０～１７　査読無し

③大塚博　「中野重治の郷里認識と「縦の線」」『ふる里への思い、そして闘い』（展覧会図録）福井県ふるさと文学館　２０１６年　６０～６２　査読無し

④林淑美　「越前の国　昭和農業恐慌　村の家」『ふる里への思い、そして闘い』（展覧会図録）福井県ふるさと文学館　２０１６年　６３～６８　査読無し

⑤林淑美　「驚きの肉筆原稿出現――中野重治の転向連作と鷗外論」『世田谷文学館ニュース』第６３号　２０１６年　６～７　査読無し

⑥林淑美　「福井県ふるさと文学館所蔵「「文学者に就て」について」の肉筆原稿に関する報告」『梨の花通信』第６４号　２０１５年　２０～２３　査読無し

〔学会発表〕（計　３　件）

①内藤由直　「文学的〝真実〟の問題――中野重治と林房雄の転向」：日本の戦中期における転向の問題　Tenkō in Trans-War Japan: Culture, Politics, History. An international workshop. Leeds University. ２０１７年7月1日

②林淑美　〔招待講演〕「中野重治の文学」２０１６年10月14日　福井県福井市「福井県ふるさと文学館」

③林淑美　〔招待講演〕「眼で見る、耳で聴く「村の家」」２０１５ 年12月5日　東京都跡見女子学園大学文京キャンパス

〔図書〕（計　２　件）

①中川成美　岩波書店　『戦争をよむ』　２０１７年　総ページ数（２０８）

②林淑美〔監修・共著〕『中野重治展　ふる里への思い、そして闘い』（展覧会図録）２０１６年　福井県ふるさと文学館　総ページ数（３～７６）

６．研究組織

(1)研究代表者

林　淑美（LIN,Shukumi）
立教大学・文学部・特定課題研究員
研究者番号：８０４４５１５５

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者

大塚　博（OOTSUKA,Hiroshi）
跡見学園女子大学・教授

内藤　由直（NAITO,Yoshitada）
立命館大学・准教授

中川　成美（NAKAGAWA,Shigemi）
立命館大学・教授

兵頭　かおり（HYODO,Kaori）